

Title	認知文法から考える「意識/直訳」問題： 「直訳」は本当に「直」なのか？
Sub Title	Translation in cognitive grammar : how literal is "literal translation" ?
Author	平沢, 慎也(Hirasawa, Shinya) 野中, 大輔(Nonaka, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.77 (2023. 3) ,p.51- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20230331-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

認知文法から考える「意識／直訳」問題 ——「直訳」は本当に「直」なのか?——*

平 沢 慎 也
野 中 大 輔

1. はじめに

英文の意味を知りたいと思ったときに「先生、この英文の訳（訳し方）を教えてください」と言って質問したことはないだろうか。また、英語の和訳問題を解いているときに「良い訳を思いついたけれど、これは意識しすぎと言われるかな？ やっぱり直訳しておこう」と思ったことはないだろうか。こうした日常的な言葉遣いの背後には、訳と意味は同じであるという想定、直訳は意識と違って英語の何かと「直」に対応しているという想定が隠れていると言える。しかし、こうした想定は本当に正しいのだろうか。本稿では、認知文法と呼ばれる言語学の理論から「意識／直訳」について考えてみたい。

本題に入る前に、「意識／直訳」を取り上げる理由について簡単に述べておく。私たちは日々言語を使用して生活しているが、それがあまりに当たり前になっているせいで、言語について立ち止まって考える機会は少ない。私たちがもっとも自覚的に言語に向き合う機会は、母語よりも外国語

に触れているときだろう。外国語に触れれば自然と母語との比較を行うことになるからだ。その際、私たちが使う物差しとしてよく持ち出されるのが「意識／直訳」である。だとすれば、「意識／直訳」という言葉遣いには、私たちの言語に対する関心や態度がある種凝縮した形で反映されていると言えるのではないだろうか。筆者らは言語について考える機会を研究者に限らず幅広く提供することを目指しており、「意識／直訳」を扱うことはその目的に適っていると考えた。

翻訳に関する研究の歴史は特に文学の領域において長く、専門書も数多くあるが、上に述べたように言語について考える機会を提供するには、純粋に言語学的な見地から発信することにも意義があるだろう。紙幅の関係上、翻訳研究で蓄積された成果を紹介したり、翻訳研究と本稿の主張との違いを詳述したりすることはできないが、その分、認知文法の考え方を一般読者にも十分に理解できるよう丁寧に説明し、英語教育や（実務・文芸の別を問わず）翻訳に携わる方々の「意識／直訳」への関心に広く応えることを目指した。

2. 認知文法概説

本稿が依拠する認知文法（Cognitive Grammar）は、アメリカの言語学者 Ronald W. Langacker が創始した言語理論である（Langacker 1987¹⁾、2008、2016²⁾）。その最大の特徴の1つは、人間が言語を習得し使用する仕組みを、人間の自然な心の働きに訴えることによって説明しようとすることである。

「人間の自然な心の働き」としては、言語という領域に限定されない、もっと一般的な認知能力が想定されている。そこでまずは、いったん言語を離れて考えてみよう。

2.1. 人間の自然な心の働き³⁾

思考実験として、ある架空のCG映画を初めて鑑賞することを想像して

ほしい。上映が始まると、掃除機が喋りだし、次にテレビが歌を歌い始めたかと思ったら、今度は冷蔵庫が寝言を言い始める……。ここで我々は、電化製品が生命を持ち言葉を話す世界が描かれているのだと気づく。このとき我々は、掃除機（電化製品 A）、テレビ（電化製品 B）、冷蔵庫（電化製品 C）の事例から頭の中で共通性抽出すなわち**抽象化**を行い、この作品では電化製品一般——これを X とする——が人間と同じように振る舞うのだと理解したことになる。なお、本稿では、共通性抽出の前と後をそれぞれ**具体**と**抽象**と呼ぶことに注意してほしい⁴⁾。A、B、C に関する知識は具体知識であり、X についての知識は抽象知識である⁵⁾。以下のように図示することができる。

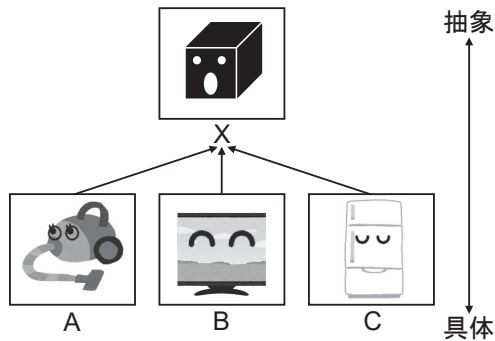


図 1 抽象化

この「抽象化」が、言語使用以外の場面で見られる人間の自然な心の働きの 1 つ目である。

2 つ目は、**抽象知識**と**具体知識**の両立である。電化製品が喋るという共通性に気が付き抽象化がなされた途端に、その抽象化の元となった A、B、C の姿を忘れてしまう——「あれ、何が喋ってたんだっけ？」——ということは起こらない。人間の脳はそういう風にはできていないのである。かくして、我々の頭の中は、X についての抽象知識と A、B、C についての具体知識が両立している状態になる。このように抽象知識と具体知識が両

立している状態は人間にとって極めて自然で、普通の状態であると考えられる。

3つ目は**頻度効果**である。ここで言う頻度効果とは、ある具体例に触れる頻度が増すにつれてその具体例についての記憶が強化され、定着していくことを指す。たとえばA（掃除機）の登場回数が多く、ある時点で10回登場しているとしよう。我々観客はAを10回見ていることになる。これにより、我々の頭の中ではAに関する知識が強化されていく。以下の図では、Aを他の電化製品よりも太い枠で表示することによって、これを擬似的に表している。なお、Xについての知識も太い枠で表示しているのは、Aに多く触れたということはそれを介してXにも多く触れていることになるからである。

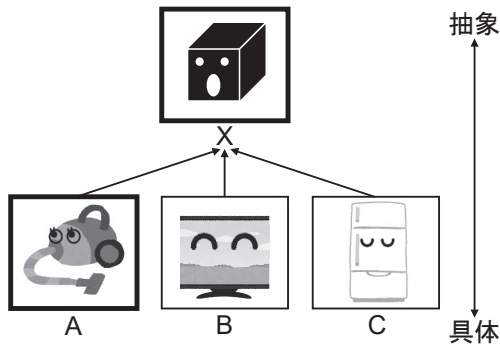


図2 頻度効果

4つ目は**具体知識の優先的参照**である。これは、頭の中に定着している知識のうち具体性の高いものの方が抽象度の高い知識よりも活性化されやすい、という人間の傾向を指す⁶⁾。たとえば、図2のような知識状態にある我々がAを再び、つまり11回目に見たときには、我々の脳はその相手をまさにAとして認識する——「何度も出てきたあの掃除機だ！」——なのであって、抽象的な電化製品Xの一種だという認識が真っ先に活性化されるわけではない。これは、Xについての抽象知識よりもAについて

の具体知識の方が活性化されやすいことの現れであると言える。もちろん、電化製品 D が初めて登場する場合には、我々の脳はこの相手を X の一種として認識するだろう。この時点ではまだ D についての知識が頭の中に存在しないのだから、「あ、D だ」とは思いようがない。この場合には、活性化しうる知識のうち最も具体性が高いのが X についての知識なのである。

2.2. 言語の使用基盤モデル

認知文法では、2.1 節で確認した 4 つの（及び本稿で言及していない様々な）自然な心の働きが、言語の習得と使用においても起こると考える。上の電化製品物語の知識が実際にその作品を鑑賞することによって構築されるものであるのとまったく同様に、言語の知識も言語使用の現場に立ち会うことを通じて構築されると考える。認知文法のこのような言語観は、その性質ゆえに、言語の**使用基盤モデル** (usage-based model) と呼ばれる (Langacker 1988, 2000)。

自然な心の働きによって言語がどのように習得され、使用されると考えられるか、ここでは英語の接続詞 *when* の用法——[X 動詞句₁ *when* Y 動詞句₂]——を例に取りながら、順に見ていくことにする。

when には様々な用法があるが、ここでは平沢 (2019) が扱っている用法のうちの 1 つに絞って考えてみよう。*when* は、以下に示すように、誰かの実際の発言が正しいとか間違っているとかいったことを言うのに用いられることがよくある。

- (1) He was right **when** he said there were a lot of people in his office.

(〔ドラマ〕 *Columbo*, Episode 8)

彼の言う通り、確かにオフィスには人がたくさんいたよ。

- (2) [...] you were wrong **when** you told me she has no experience with men.

(〔小説〕 Paul Auster, *Invisible*)

- [...] この前「セシルは男性経験ゼロだ」とおっしゃっていましたが、そうでもないようですよ。
- (3) [...] I told you the truth **when** I said that nothing happened between me and Kes. (〔ドラマ〕 *Star Trek: Voyager*, Season 2, Episode 7)
 [...] さっきの話は本当だからな。僕とケスの間には何もないって話。
- (4) You lied to me **when** you said that you were too busy to come to my party. (〔映画〕 *A Rainy Day in New York*)
 忙しくてパーティーには来られないって言ってたのは、嘘だったのね。

以下では、こうした実例に触れながら英語母語話者が **when** についてどのような知識をどのように身につけていくか、そして、発話の現場ではその知識をどのように使っているのかを論じる。

まず、**抽象化**のプロセスを確認する。英語母語話者が **when** の実例に触れながら **when** の知識を獲得していくプロセスは、説明の便宜上簡略化して示せば、図3の下から上へと抽象化を進めていくプロセスであると考えられる。なお、主節も従属節も主語が **X** になっているのは同じ主語であることを表している。また、**be** 動詞や **say** など動詞部分は辞書形で代表させている（発音も同様で、たとえば **be** については [æm] や [ɪz] ではなく [bi] を採用している）。

英語母語話者は (1)-(4) のような実例に大量に触れながら、脳内で無意識のうちに共通性抽出を行い、[X be {right / wrong} when X say ...] というパターンがあることを発見するだろう（図の⑤）。そして、**when** 節内の動詞が **say** 以外の伝達動詞（たとえば **insist**）である場合もある（図の⑥）ことから、さらに抽象化して、[X be {right / wrong} when X 発話の動詞句] というパターンにも気がつくだろう（図の③）。他にも、主節の述語が **be** {right / wrong} ではなく（嘘をつくという意味の）**lie** である場合にも気がつき（図の⑦⑧④）、これらすべてに共通するパターンとして [X 正

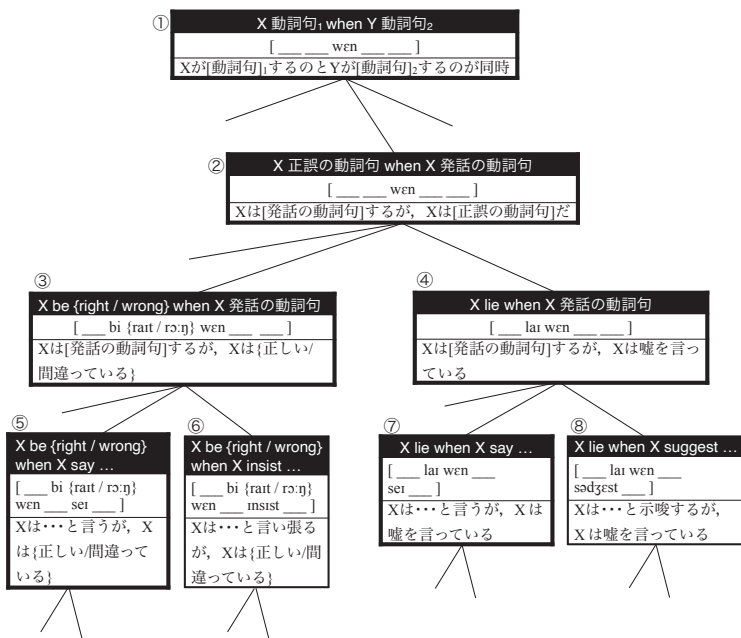


図3 whenのありうる知識構造 (の一部)

誤の動詞句 when X 発話の動詞句] も抽出するだろう (図の②)。whenにはこの他にも様々な用法があり、それらに共通するもっと抽象的なパターンとして [X 動詞句₁ when Y 動詞句₂] の知識 (図の①) も身につけることになる⁷⁾。

次に、抽象知識と具体知識の両立について確認する。母語話者が、図3で最も具体的な⑤などから、一段上の抽象度を持つ③を抽出した途端に、その抽出の元である⑤などを忘れることはない。したがって、母語話者の頭の中には、③という抽象知識と⑤などの具体知識が共存することになる。同様の理屈で、②を抽出した後も、その抽出の素材となった③や④は記憶されたままである。さらに、①を抽出した後も、その抽出の元である②は記憶されたままになっているはずである。かくして、母語話者の頭の中には、図3の最下段から最上段まで様々な抽象度の知識のネットワークが

形成されることになる。これが、言語における「抽象知識と具体知識の両立」の意味するところである。

確認する3点目は**頻度効果**である。insistを含んだ⑥と異なり、sayを用いた⑤は非常に頻度が高く、英語を使った日常生活の中で何度も見聞きする表現であるから、記憶は強化されていくだろう。図3ではこうした高頻度表現を太枠で示している。⑤を太枠にするのと同時に③も太枠にしてあるのは、⑤に何度も出会うということはそれを介して③にも何度も出会っていることになるからである。

最後に、言語における**具体知識の優先的参照** (Langacker 1987: 11.2; Langacker 2009) がどのようなものかを例示する。次の2つの英文を母語話者が産出する際に参照されている (whenに関する) 知識について考えてみたい。

- (5) Chomsky is right **when** he says he was not interested in computers. He genuinely wasn't. ([学術文章] Chris Knight, *Decoding Chomsky*)
 チョムスキーはコンピューターには関心がなかったと言うが、たしかにその通り。本当に関心をもっていなかった。
- (6) The retired colonel [=Douglas Macgregor] said German Chancellor Olaf Scholz hit the mark **when** he claimed European security likely requires Russian participation [...]
 ([ニュース記事] Fox News Channel, "Biden's 'infinite ignorance' in speech makes Russian invasion of Ukraine 'inevitable': Col. Macgregor"⁸⁾)
 ヨーロッパの安全のためにロシアの参加が必要になるであろうというドイツのオーラフ・ショルツ首相の主張は的を射ていると、元陸軍大佐のマクレガー氏は述べる。

これらの例文に合致するパターンを図3の中から探してみよう。具体知識の優先的参照の原則に従い、具体性の高いものから順に、つまり図の最

下段から上に向かって順に見ていくことになる。まず (5) は図の①②③⑤に合致しているが、そのうち最も具体性の高い⑤の知識を参照して産出された英文だと考えればよいだろう。一方、(6) は最下段の⑤～⑧にもその1つ上の③④にも合致しないが、①②には合致する(②に合致していると言えるのは、hit the mark の部分は「的を射たことを言う」という意味であるため正誤の動詞句の一種だと考えられ、かつ claimed ... の部分も発話を表わす動詞句になっているからである)。(6) は①②のうちより具体性の高い方、つまり②の知識を参照して産出されたものだと考えられる。以下に図示するように、(5) と (6) では産出にあたって参照された知識の抽象度が異なるのである。

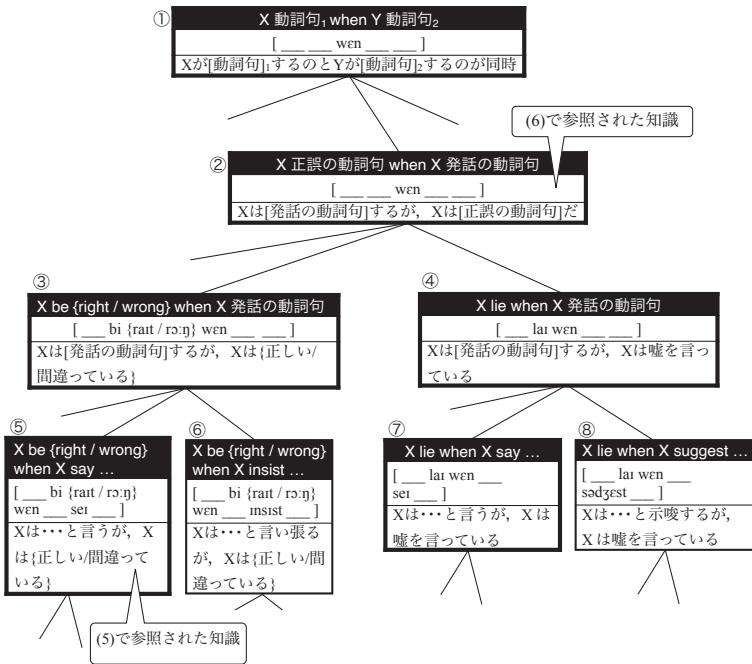


図 4 when と知識参照

ここまで、人間の自然な心の働きによって表現の知識のネットワークが

どのように構築され利用されるかを見てきたが、その表現1つ1つの知識がどのようなものであるかについては詳説してこなかった。次の節ではこの点について認知文法がどのような考え方を採用しているかを示したい。

2.3. 形式と意味

認知文法では、言語使用時に参照される知識の単位は、抽象度の高低にかかわらず、形式と意味のペアをなしていると考えられる。たとえば [X lie when X say ...] で言えば、[___ lai wen ___ sei ___] という発音が「形式」に対応し、「Xは…と言うが、Xは嘘を言っている」が「意味」に対応する。[X lie when X say ...] 自体は単に論文内で言及しやすいように用意したラベルに過ぎず、認知文法における何らかの概念を表しているわけではない。以下に図の形で示しておく。

X lie when X say ...	(←この論文におけるラベル)
[___ lai wen ___ sei ___]	←認知文法における「形式」
Xは…と言うが、Xは嘘を言っている	←認知文法における「意味」

図5 形式と意味

しかしこれはあくまで単純化した図式である。2.3節ではこの「形式」と「意味」のそれぞれがどのようなものでありうるかをもう少し詳しく説明しておきたい。それにより、認知文法における訳というものがどのようなものであるかが明確になるからである。

2.3.1. 形式

認知文法における「形式」には、発音という聴覚的な情報に加えて、スピングという視覚的な情報 (Langacker 1987: 81, footnote 16) も含まれる。ジェスチャーや表情も視覚的な形式と特定の意味が結びついたものと考えられる (Langacker 2016: 31)。

これまで ___ と空所で表記してきたのは完全に抽象化されている要素、

つまり「指定なし」の要素で、そこにはどんな発音、どんなスペリングも入りうるということを示している。たとえば [smell [酒など] on one's breath] というフレーズでは、酒などならば必ず含まれる発音・スペリングとか、所有格 (one's) ならば必ず含まれる発音・スペリングとかいったものが存在しないので、このフレーズの形式は [smɛl ___ a(:)n ___ brɛθ] ・ [smell ___ on ___ breath] と表記することになる。

2.3.2. 意味

続いて「意味」の側に移ろう。「形式」は発音したり書いたりすることによって、他者にとって目や耳で観察・知覚可能な形で表に出すことができるのに対して、「意味」は完全に頭の中のものであり、どんな手段を取ろうとも他者が直接的に観察・知覚することのできないものである⁹⁾。

認知文法では意味というものを非常に多面的なものとして想定している。まず、当然ながら、**指示対象**を意味の一面であると認める。たとえば coast と shore は「海岸」という共通の場所を指しており、この指示対象は両単語の意味であると言える。

しかし、指示対象は意味の一部でしかない。認知文法では、指示対象に対する**見方・捉え方**まで意味の中にも含めるのである。たとえば coast と shore は、同じ場所を指してはいるが、捉え方が異なっている。Fillmore (1982) によれば、coast は陸地から見た「海岸」であり、shore は海から見た「海岸」なのである。こうした捉え方・見方の違いも認知文法では意味の違いとみなす。

上の coast と shore の例から明らかなことであるが、捉え方まで含めた指示対象を理解するために必要な**背景**も意味の中にも含まれる。coast を理解するにも、shore を理解するにも、陸と海岸と海からなる風景全体というものを理解していなければならない。この全体を背景として初めて coast や shore といった語が何たるかを理解できるのである。ここで言う背景は高度に文化的なものでありえる。ごく常識的な例を出せば、Mon-

day という単語の意味を理解するには、7日からなる週という単位を認定するような文化を知っていなければならない。この文化的背景知識も Monday の意味の中に含まれているわけである。平沢 (2021a: 44) の I love you も良い例だろう。この表現は、恋愛の相手に対して言う場合には、たとえば「ずっと一緒にいる覚悟が決まった」のように、非常に重いメッセージを伝達する。そのため、「付き合っている」と言ってよい状態になってからさほど時間が経っていない段階で言うと、相手を当惑させてしまう。逆にいつまで経っても言わないと、相手を不安にさせてしまう。恋愛の相手に言う I love you は、言うタイミングを選ぶ非常に難しい言葉なのである¹⁰⁾。付き合い始める段階で愛の告白の言葉として一度 I love you と言っているはずではないかと思われるかもしれないが、英語圏では日本と違って（お付き合いを始めるための）愛の告白という文化が定着していない。もちろん個人的にすすんで愛の告白をする人はいるが、それが規範となっているわけではない。食事などデートを重ねていくうちに、付き合っていると言える「度合い」が少しずつ増していくのである。英語母語話者にとって、恋愛の相手に言う I love you はこうした文化的な知識を背景として理解されるものであり、Monday の場合と同様、こうした背景を意味から除外して考えるのは適切でない。

さらに、認知文法では、**発話意図**も意味の一部とみなす。たとえば「もしも私があなた（の立場）だったら」を表わす if I were you と if I were in your {shoes, place, etc.} は、指している事態としてはほぼ変わらないが、慣習的に結びついている発話意図は大きく異なる。if I were you は聞き手をたしなめたり助言・忠告をしたりするのに用いられやすいのに対して、if I were in your {shoes, place, etc.} は聞き手に同調したり共感を示したりするのに用いられる傾向がある（詳しくは平沢 2021b へ）。このような発話意図の違いも意味の違いとみなすのである。平沢 (2021c) から別の例を出そう。

- (7) [状況説明] Michael は知人の女性が結婚指輪らしきものを川に投げ捨てるのを目撃した。

“**Was that what I think it was?**” Michael says.

(〔小説〕 Emily Giffin, *Baby Proof*)

「今のってまさか」とマイケルは言う。

- (8) [状況説明] Brett は自分が愛用しているバットを Stephanie Tanner に見せる。Stephanie が見てみると、そこには自分のイニシャルである S.T. とハートのマークが。

Oh, Brett. **Does this mean what I think it means?**

(〔ドラマ〕 *Full House*, Season 4, Episode 22)

ブレット、これの意味って、もしかして…

太字部分のような一見くどい言い方が、英語では「にわかには信じがたい」「まさか」という驚きを伝達するためによく用いられる。このような発話意図がこうした言い回しのパターンの意味に含まれているわけである(詳しくは平沢 2021c へ)。

ジャンルの特性、文体的な特徴も、認知文法からすれば、立派な意味の一側面である。たとえば「元交際相手の男」という日本語表現を聞けば、これはいかにも報道関係の言葉だという感じがする。英語で例を出すと、[under [年齢]] というパターンは、Children under 10 are not allowed to ... unless they are accompanied by ... のように「～歳未満だと〇〇は禁止、△△は許可」といった取り決めの提示で用いられることが多い。日常会話で、No, no, no, she's not 10 yet. と言うつもりで、No, no, no, she's under 10. と言ってしまうとやや不自然に響く。また別の例を出せば、once upon a time や lived happily ever after (Langacker 2008: 460), motionless (本稿 4.2 節) という表現には物語の言葉遣いだという感覚がべったりと貼り付いている。こういったジャンル・文体的な感触も、表現の意味の一側面として取り込まれることになる。

認知文法における意味の諸側面をいくつか挙げてきたが、これですべての側面をリストアップできたわけではない。そもそもこれらの側面が完全に切り離された異なる側面だと言えるわけでもない¹¹⁾。重要なのは、人間がある表現を聞いたり見たりしたときに、そして話したり書いたりしたときに、その人間の心・脳の中で起こる様々なことが「意味」に含まれるという点である。

3. 認知文法から見た意味と訳

3.1. 「訳す」とは何をする行為か

2節の内容を踏まえて、いよいよ、認知文法の立場から意味と訳の関係について議論していきたい。まずは認知文法にとって「訳す」とは何をする行為なのかを考えてみよう。

念のため確認しておきたいのが、英語母語話者が英語を使うときに参照している知識が形式と意味のペアになっているのと同様に、日本語母語話者が日本語を使うときに参照している知識もまた形式と意味のペアになっているという点である。たとえば「切ない」という表現が [setsunai] という発音および「切ない」というスペリングを形式として持ち、そこに何らかの意味が結びついていることは納得しやすいだろう。ただしその意味を言葉でうまく説明できる必要はない。話者が（意味に関する知識に限らず）言語知識を持っていてその言語を適切に使いこなせることと、話者がその言語知識を言葉で明示的に説明できることは別である¹²⁾。大半の日本語母語話者にとって、「切ない」の意味は言葉では説明できないけれども確かに頭の中に知識として存在しているのである。

さて、おそらく理論的な立場によらず合意されているように、「訳す」とはある言語の語句や文、文章の意味を別の言語で言い表そうとする行為のことであり、「訳」はその結果物のことである。これを、認知文法的な形式と意味のペアという観点から捉え直すと、以下のようになる。

- (9) ある言語においてある形式 (F1) と結びついている意味 (M1) を特定した上で、別の言語においてその意味に近い意味 (M2) と結びついている形式 (F2) を見つけ出す行為が「訳す」という行為であり、その結果物である形式が「訳」である。

たとえば以下の英文を日本語に訳す場合を想定してみよう。特に *dry* に注目するものとする。空欄にはどのような動詞を入れるのがよいだろうか。

- (10) Sally set rinsed dishes in a rack, **dried** the plates with a towel, and put them into her treasured china hutch.

(〔短編小説〕 Kristine Kathryn Rusch, “Christmas Eve at the Exit”)

サリーは洗った皿をラックに入れ、タオルで _____, 大事にしている食器棚に入れた。

まず、(9) の「ある言語においてある形式 (F1) と結びついている意味 (M1) を特定」というのは、ここでは英語において *dry* というスベリング (F1) と結びついている意味 (M1) を特定することを指す。[*dry* + [濡れているもの]] の意味は「[濡れているもの]を水分・湿気の除去された状態にする」である。風を当てる場合なのか、布などで拭く場合なのかは *dry* 自体が指定するものではない。(10) は布などで拭く場合だとはっきりわかるが、それは “with a towel” と書かれているからである。

それでは、続いて、(9) の「別の言語においてその意味に近い意味 (M2) と結びついている形式 (F2) を見つけ出す行為」をしてみよう。ここでは「日本語において <[濡れているもの]を水分・湿気の除去された状態にする> に近い意味と結びついている形式を見つけれ」ということである。日本語にはこれと近い意味を表わす形式が複数ある。たとえば「乾かす」という形式は「[濡れているもの]を風などによって水分・湿気の除去された状態にする」という意味と結びついている。英語の *dry* の意

味と違って「風などによって」という要素が付け加わっている。他に「拭く」という形式もある。この形式は「[濡れているもの]を布などによって水分・湿気の除去された状態にする」という意味と結びついている。英語の dry の意味と違って「布などによって」という要素が付け加わっている。dry 単体の意味と比較すると、「乾かす」も「拭く」も要素の追加があり、完全に一致はしないことになるが、(10) の英文全体には with a towel が含まれているので、より妥当なのは「拭く」の方であり、空欄には「拭いて」などを入れるのがよいと判断できる。以上のプロセスは次のように図示することができる。

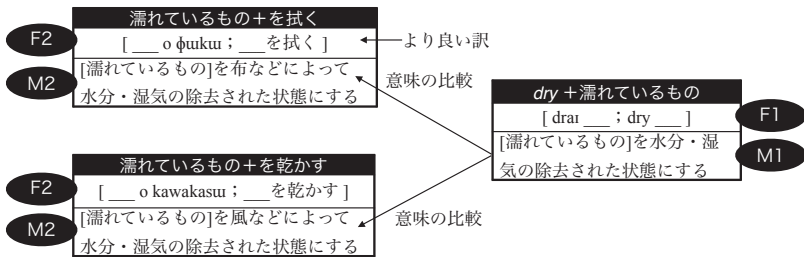


図6 (10) の dry を訳すプロセス

ここで注意したいのが、結果物としての「訳」は意味側のもではなく形式側のも——発音・スペリング——だということである。図6で「より良い訳」の矢印が向けられる先は「[濡れているもの]を布などによって水分・湿気の除去された状態にする」ではなく（これはいかにも訳ではないという感じがするだろう）、[___ o φuiku ; ___ を拭く]の方である。訳を言ってしまうのであればこれを発音すればよいのであり、訳を書いてと言われればこれを書けばよいのである。

このことを踏まえると、英語学習者がある英単語なり英文なりの意味を知りたいと思ったときに「先生、この訳を知りたいです」と発言するのはかなり奇妙なことに思えてくる。以下に図示したように、聞きたいと思

っていることと実際に聞いていることにズレが生じてしまっているのである。

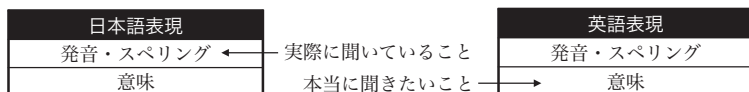


図7 意味を聞きたいのに「訳を教えて」と言う場合

おそらくこのように日本語側の発音・スペリングを聞き出した後、質問者は、その日本語の発音・スペリングに対応する日本語の意味を思い浮かべ、「本来聞こうとしていた英語表現の意味はきっとこの日本語側の意味と(大体)同じなのだろう」と推測することになる。

こうしたプロセスでも一応、本来知りたかった英語表現の意味(に近い意味)に到達することができるわけだが、回り道をしているようには感じられないだろうか。英語表現の意味を知りたいならば、ストレートに意味を聞けばよいのである。

もちろん、ごく普通の英語の教室で「言語知識の単位が形式と意味のペアになっている」という認知文法の想定を明示的に習う機会はないだろうが、こうした想定を無意識のうちに持っている人は多いものと思われる。もしそのような想定を持っていて、かつその想定に忠実でありたいと思うのであれば、意味を質問するときにはストレートに「意味を教えてください」と言うのがよいだろう。

英語表現の意味を教えてくださいと言われた教師は、もしもその表現の意味と非常に近い意味をもつ日本語表現が存在する場合には、その表現を示して「この日本語表現の意味とだいたい一緒だよ」と答えることも可能であるが、意味の提示の仕方は他にもありえる。たとえば、英英辞典の記述を示すということもできるし、その記述を日本語に訳して示してやることもできる。apple など目に見える物体を指す英語表現の意味ならば図やイラストで示すこともできるし、時系列に沿って書かれた英文の意味を問

われたならば年表形式で答えることもできる¹³⁾。

3.2. 大きな単位で考える

dry と「乾かす」「拭く」の例で触れたように、ある言語の単語と別の言語の単語の間には、一見対応関係がありそうに見える場合であっても、何かしらのずれがあるのが普通である。外国語学習において、一対一対応で訳語を当てはめることは、初めて出会う単語を学ぶ際の取っ掛かりとしては有益だが、その限界にも注意を向ける必要がある。

しかし、単語よりも大きな単位であれば、精度の高い訳を提案できることも多い。dry の場合、[dry [濡れているもの] with [布]] というフレーズなら [[布]で[濡れているもの]を拭く] という日本語訳でかなりの程度対応できる。同様に、[dry one's hair] / [髪を乾かす] や [dry [濡れているもの] in the sun] / [[濡れているもの]を日向で干す] といったフレーズ単位で比較をすれば、両言語の間でずれが少ないことがわかるだろう。

dry であれば「dry = 乾かす, 拭く, 干す」のように覚える訳語を増やせば対処できると考える人がいるかもしれないが、訳語を増やすという発想ではどうにもできない場合もある。以下の例の太字部分を見てみよう。

- (11) Typhoon No. 19 brought record-breaking rainfall to more than 100 observation points over the 24 hours from Oct. 12, 2019, causing many rivers to flood. **The Chikumagawa river burst its banks, inundating trains for the Hokuriku Shinkansen Line in Nagano.**

([ニュース記事] Asahi Shimbun Asia & Japan Watch, “Study: Global warming added to major losses in Typhoon No. 19”¹⁴⁾)

台風19号により、2019年10月12日から24時間にわたって100以上の観測点で記録的大雨が発生し、多くの川が氾濫した。千曲川は堤防が決壊し、長野市にあった北陸新幹線の車両が浸水した。

「burst = 破裂させる」のように考えると、「千曲川がその堤防を破裂させた」といった訳が思い浮かぶかもしれないが、それは極めて不自然な日本語であり、そもそも意味が通じる表現になっていない。実は The river burst its banks は川の土手（堤防）が決壊したことを表す高頻度表現であり、英語母語話者であれば1文単位で身につけている言い回しである（野中2022）。英語の burst が他動詞であるのに対して、日本語の「決壊する」は自動詞であり、単語レベルで見たときには「burst = ○○」といった図式に当てはめづらいが、[The river burst its banks] / [川の土手が決壊した] といった文レベルで捉えれば適切な訳を見出すことができる。

大きな単位で日本語訳を考えるべき表現というのは他にもたくさんある。たとえば英語には This recipe serves five. 「このレシピは5人分だ」といった表現があるが、この場合は主語、目的語を含めて [[レシピ] serve [人数]] / [[レシピ]は[人数]分だ] として捉えるべきである。本稿ですでに挙げた例で言えば [X lie when X say ...] も同様で、この表現を学習する際に「when = ○○」と訳語を割り当てようとするのは避けるべきであるが（これだと [X lie when X say ...] の意味を誤解してしまう恐れがある）、[X lie when X say ...] という単位に [Xは…と言うが、Xは嘘を言っている] のような訳を割り当てるのは効果的であると言える。

3.3. 意味・訳と文法

3.3.1. 「文法通り」に訳さない？

ここでは、認知文法における「文法」の説明をするとともに、文法と意味・訳について考えたい。まず以下の英文を見てみよう（平沢・野中2021）。

- (12) Martin Luther King's dream has not yet come true. Blacks and whites are not yet equal. **Look at** the young Americans who go to prison, cannot find a job, or die in street violence. For every white person who finds himself in this group, there are five blacks.¹⁵⁾

〔伝記〕 Alan C. McLean, *Martin Luther King*)

キング牧師の夢はいまだに実現していません。黒人と白人はまだ平等ではないのです。アメリカ人の若者のうち、刑務所に入るか、失業しているか、路上の暴力事件で亡くなる者を見れば、白人1人に対して黒人は5人の割合であることがわかります。

筆者の1人(野中)がこの英文を授業で取り上げ、その日本語訳を示したところ、Look at ... の部分の訳に関して「文法通りに読むとそうは訳せなかったの、勉強になった」という感想をくれた学生がいた。命令文の「文法」を「…しろ、しなさい」という訳に対応するものと固定的に考えていて、そこにlook「見る」を当てはめても上記のような訳にはならないため、「文法通り」ではない、教員は翻訳にあたって「文法」を超えた何かの知識を利用したのだろう、と考えたのかもしれない。しかし、(12)を訳すにあたって利用したのは、筆者らにとっては、まさに「文法」である。ここには「文法」という用語をどのように捉えるかという問題が関わっている。

3.3.2. 認知文法における「文法」

(12) では Look at ... を「見てみれば」と訳しているが、命令文が if ... に相当する意味を表すケースとして [命令文 + and ...] があることは一般向けの英文法書でも紹介されている。たとえば、『表現のための実践ロイヤル英文法』(綿貫・ピーターセン 2011) では if ... と [命令文 + and ...] が書き換え関係にあると述べ、以下の例を掲載している。

(13) a. **If you hurry up, you'll be able to catch the last bus.**

b. **Hurry up, and you'll be able to catch the last bus.**

急げば最終バスに乗れますよ。

(綿貫・ピーターセン 2011: 573)

実は、lookはこのパターンでよく用いられる動詞の1つであり、[If you look at ..., you {will, can, ...} + 認識動詞 ...] や [Look at ..., and you {will, can, ...} + 認識動詞 ...] はよくある言い回しになっている。

- (14) **If you look at history, in recent history, you'll see the cycles of belief in American decline come and go every 10 or 15 years or so.**

([TED 動画] Joseph Nye, “Global power shifts”)

歴史を見れば、特に最近の歴史を見れば、アメリカが衰退したという意見が、10年とか15年といったサイクルで出ては消え出ては消えを繰り返していることに気づくでしょう。

- (15) **Look at any religion and you'll see disputes and arguments going all the way down.**

([TED 動画] Chetan Bhatt, “Dare to refuse the origin myths that claim who you are”)

どんな宗教を見ても、言い争いや論争が絶えないことがわかります。

[Look at ..., and you {will, can, ...} + 認識動詞 ...] のバリエーションとして、以下のような and 無しの例を挙げることができる (and が無い代わりにコロンが含まれているが、音声上はもちろんコロンは聞こえない)。get a sense of ... は認識動詞に相当するフレーズとして考えられる。

- (16) [状況説明] 講演者がアイスランド語の hnugginn という単語をスクリーンに映している。

Or **look at the foreign word and the sounds: can you get a sense of the range of meanings that it's pointing you towards?**

([TED 動画] Daniel Tammet: Different ways of knowing)

また、この外国語の単語とその発音から、どのようなタイプの意味を表そうとしているのか感じ取ることができますか？

このようなバリエーションの延長線上に、and だけでなく [you {will, can, ...} + 認識動詞] が無くなった [Look at] というパターンを位置づけることができる。X という表現の後に Y が続くことが何度も起これば、人は次第にそれを簡略化したものを使用するようになるだろう。[Look at] の場合は、そのような簡略化が一時的なものではなく十分に定着したパターンになったのだと言える。これらの言語単位は、英語母語話者の頭の中で互いに関係しあって、以下のようなネットワークを形成していると考えられる。

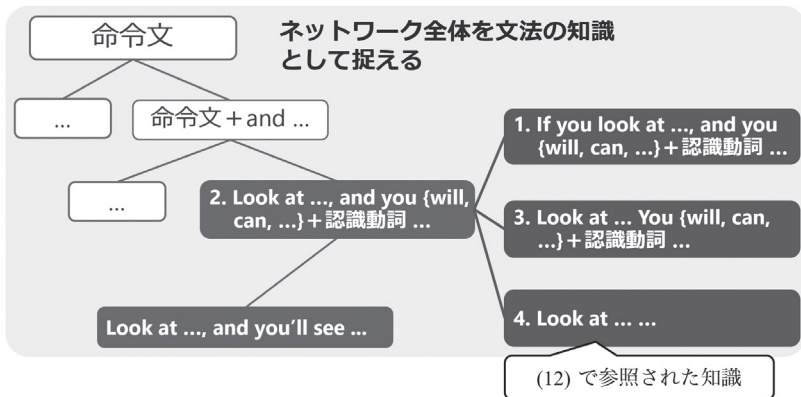


図8 命令文の知識（野中 2022b より）

「文法」という用語が使用される場合、この図における [命令文] や [命令文 + and ...] の部分だけを指している（具体例にあたるものは文法の範囲外とする）ことが多いかもしれない。しかし、認知文法では、具体例であってもよく使われるものは文法の一部であると考えられるため（野中・平沢 2022 も参照）、[Look at ..., and you {will, can, ...} + 認識動詞 ...] やそのバリエーションである [Look at] を含めたネットワーク全体が文法を構成していることになる。(12) が産出されたときに参照された言語単位は [Look at] だろうと想定することができるが、これも命令文の知

識の一部である（ネットワークとしての文法知識については図4も参照。(5)を産出する際は、図4の中でできるだけ具体的な知識が参照されると考えたことを思い出してほしい)。

このネットワークに含まれる[命令文]や[命令文 + and ...]や[Look at]はいずれも形式と意味がセットになった言語単位である。(12)を訳す際は、まず母語話者が参照したと考えられる言語単位[Look at]の意味を特定し、それとほぼ同じ意味を表す日本語の形式を探す、というプロセスを経ることになる。今回はそのような日本語の形式として「…を見てみれば…がわかるでしょう」を選んだ次第である。以上のように考えれば、(12)の翻訳にあたって、文法を超えた何かを利用したわけではなく、むしろ認知文法でいう「文法」を利用したのだということがわかっていただけるだろう。一度「…を見なさい」と訳してみても、それが不自然だから文脈に合わせて(=「文法」以外の何かを利用して)訳文を調整する、というプロセスを経たわけではないのである。

以上、2節と3節を通じて、認知文法の言語観を概説し、そこに「意味」と「訳」というものがどのように位置付けられるかを論じてきた。4節では、こうした前提を踏まえて、本稿のタイトルにもある「意識」と「直訳」という概念についてどのような帰結が導かれるかを考えてみよう。

4. 「直訳」は本当に「直」なのか——認知文法からの回答——

4.1. 一般的な「直訳」観

いわゆる「直訳」と「意識」について認知文法の観点から考えるにあたって、まずは一般的な「直訳」観と「意識」観がどのようなものであるかを確認しておくのがよいだろう。ここでは特に「直訳」の方に焦点をあてたい。

おそらく、言語学や翻訳論など特定の学術分野の訓練を受けていない一般的な日本語母語話者にとっての「直訳」「意識」とは以下のようなもの

だろう。なお、直感的にわかりやすくするため、英語から日本語への訳を想定することにする。

(17) 一般的な「直訳」「意識」観（英語から日本語に訳す場合）

英文を単語に分解し、その各単語と同じ意味の日本語のシンプルな表現を組み合わせたものが「直訳」で、多くの場合不自然な日本語になるが、元の英文には忠実に対応している。ここから、原文への忠実さを犠牲にして日本語としての自然さを優先させていくと、「意識」になっていく。

果たして、このような「直訳」は本当に原文に忠実に——「直」に——対応しているのだろうか。「意識」とされているものは、本当に「直訳」に比べて原文に対する忠実さが低いのだろうか。以下では、認知文法の想定から導かれる答えは「否」であることを3つの観点から論じる。

4.2. 意味の多面性

1つ目は意味の多面性の観点である。2.3.2 節で述べたように、認知文法における「意味」は非常に多面的である。そのため、(17) で前提とされているように、ある言語と別の言語で単語の意味が「同じ」であることはほとんどない。

たとえば *motionless* という単語について深く考えてみよう。多くの英和辞典で訳語として「動かない」「静止した」というシンプルな表現が挙げられているが、英語の *motionless* と日本語の「動かない」「静止した」は意味が同じであると言えるだろうか。2.3.2 節で述べたように、*motionless* には小説や物語で使われる言葉だという感覚が貼り付いている。このことは、アメリカ英語の実例が収録されている約 10 億語規模のデータベースである *The Corpus of Contemporary American English (COCA)* で検索することで確認できる。以下は 2022 年 8 月 31 日の検索で得られたデ

ータである（数値は検索ヒット件数）。

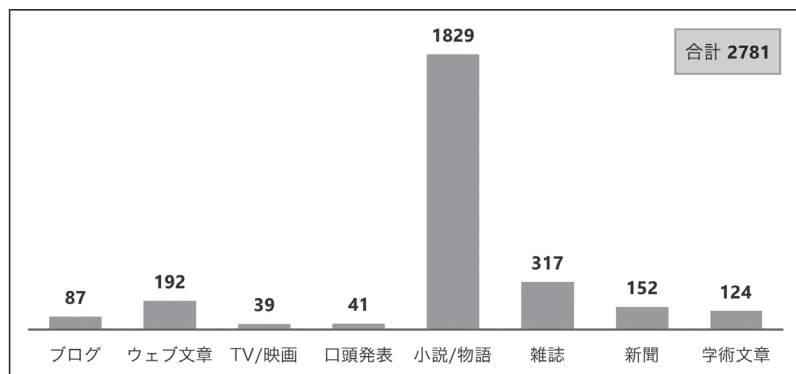


図9 COCAにおける motionless のジャンル別頻度

motionless の使用ジャンルが小説・物語に著しく偏っていることがわかる。そして、認知文法の想定では、この文体的特徴は motionless の意味的特徴だということになる。

これに対して日本語の「動かない」「静止した」は小説や物語で使われやすい言葉だという感じがしない。そのような意味的特徴を持っていないわけである。この点で、「動かない」「静止した」の意味は motionless の意味と微妙に異なっていることになる。

ここで、筆者の1人（平沢）の授業を受講していたある学生が提案してくれた訳語を検討してみたい。それは「身じろぎ一つしない」である。これは「動かない」「静止した」とは違って、小説や物語で用いられやすいという印象をもたらす言葉である。その点で、motionless の意味の一部を的確に捉えている。しかし、「身じろぎ一つしない」は動きがまったくないという強調を含んでいる。その点では motionless の意味と微妙に異なっている。

さて、「動かない」「静止した」と「身じろぎ一つしない」のどちらの方

が motionless と意味的に「直」に対応しているだろうか。前者の方が「直訳」という感じがするかもしれないが、認知文法の想定を踏まえるならば、両者ともに motionless の意味的特徴をうまく捉えられている面と少しずれている面があるため、どちらの方がより「直」であるかを決めることはできない。このように、意味の多面性を認めると、「直訳すると○」のようなことをそう簡単に言えなくなるのである。

同様の議論は describe という単語にも有効だろう。この動詞は「描写する」という訳語とともに教わることが多いかもしれない。日本語の「描写する」には様々な特徴があるが、ここで注目したい特徴は「かたい」という文体的特徴である。日常会話で耳にすることは非常にまれな単語だろう。しかし、英語の describe は、以下の実例から明らかである通り、日常会話でもごく普通に用いられる。

- (18) [状況説明] 女子高校生同士のやりとり。

Tai: I met a really cool guy.

Cher: **Describe.**

Tai: He's got long hair. He's really funny. ([映画] *Clueless*)

タイ: すごくカッコいい男子としゃべったよ。

シェール: どんな奴?

タイ: 髪が長くて、すごく面白い人だった。

- (19) [状況説明] 自分の恋人が暴漢を撃退する場面を見逃した Angela が、その場面を目撃したという同僚に言うセリフ。

You saw it? **Describe** it, please.

([ドラマ] *The Office*, Season 3, Episode 18)

見たの? どんな感じだったのか教えて、お願い。

「describe = 描写する」と覚えた人にとっては、直訳は「描写する」であり、上で提示した「どんな X (かを教える)」という疑問詞を含んだ訳は原

文に忠実でない「意識」だと言いたくなるかもしれない。しかし、文体も立派な意味の側面であるとみなす認知文法の立場からは、「どんな X (かを教える)」は describe の文体的な広さ、柔軟さを適切に捉えている点では、describe の意味に「描写する」よりも接近できている。ここでもやはり、「描写する」と「どんな X (かを教える)」のどちらが「直」訳であるかは確定できないのである。

次に、複数語からなる大きな単位の観点から (17) を検討しよう。(17) からすれば、2.3.2 節の (8) の Does this mean what I think it means? を「直訳」すると「これって私が意味してると思ってるものを意味してる？」になると言いたくなるかもしれないが、この訳では、英語のこの手の言い回しにべったりと貼り付いている「まさかという気持ちを伝達する」という発話意図がまったく捉えられていない。「これって私が意味してると思ってるものを意味してる？」は、原文の発話意図という意味的特徴を「直」に反映できていないのである。

2.3.2 節で述べたように、表現の意味には「背景」も含まれる。これもまた何をもって「直」訳とするかの判定を難しくする。I love you. の場合を考えてみよう。(17) のような一般的な発想では「(私は) (あなたを) 愛している」が直訳と思われるかもしれないが、この日本語は 2.3.2 節で紹介した恋愛に関する慣習を背景とするものではなく、重い覚悟が伝わるような日本語とは必ずしも言えない。仮に「ずっと一緒にいたいくらい愛してる」と訳したら、原文に比べて複雑な文であるため意味が変わっていると言いたくなるかもしれないが、重い覚悟のようなものは「愛してる」に比べて伝わりやすいという面もある。「(私は) (あなたを) 愛している」と「ずっと一緒にいたいくらい愛してる」のどちらの方が I love you. に「直」に対応しているかは、やはり決めがたい。

このように、認知文法の想定を受け入れ、(単語の意味であれ複数語からなる大きな単位の意味であれ) 意味を極めて多面的なもののみならず、英文に対応する「直」訳が何なのかは実は答えを定めるのが非常に難しい問題

であり、(17) のように規定される「直訳」が原文に忠実であるという主張はそう簡単には維持できないのである。

4.3. 参照される意味の単位

本節ではまた少し別の角度から (17) の「直訳」観を揺さぶってみたい。試しに I shook hands with her. という例文を考えてみよう。この表現の直訳は何になるだろうか。「I=私, shake=振る, hand =手, …」と分解して「私は彼女と手を振った」が直訳だと述べる人もいるかもしれないが、[shake hands with [人]] で「[人]と握手する」を表すフレーズなのだから、そのフレーズを無理に分解せずに訳した「私は彼女と握手した」がむしろ直訳に当たるのではないか、と考える人もいるはずである。仮に前者のような直訳を「徹底分解直訳」、後者を「穏当分解直訳」と呼ぶことにしよう。穏当分解直訳を指して「直訳」と言う場面も少なくないように思われる。

穏当分解直訳は、(17) の規定のうち「英文を単語に分解し」の部分に例外を設けた直訳だと言える。その例外が熟語(イディオム)だろう。熟語を例外扱いするというのは、英語母語話者が毎回律儀に単語を組み合わせたという作業を頭の中で行っているとは限らない、と言っているに等しい。英語母語話者は熟語という大きな単位を参照して英文を作ることもあり、そのような大きな単位は無理に分解せずに考えたほうが原文に「直」に対応した訳ができるというわけである。

それでは、熟語とは何だろうか。kick the bucket「死ぬ、くたばる」や by and large「全般的に、概して」は、単語の意味がどのように表現全体に生かされているのか特定できない——部分の意味から全体の意味が予測できない——という意味で、だれもが認める熟語だと言えるだろう。では、answer the phone「電話に出る」はどうだろうか。電話(phone)が鳴って、それに対応する(answer)と考えれば、単語の組み合わせからフレーズ全体の意味が十分に予測できるように感じられるので、熟語ではないと言い

たくなるかもしれない。しかし、answer the phone は英語話者なら丸ごと覚えているフレーズであり、「answer の後に何を言おうか、the phone を続けてみようかな」と考えた末に answer the phone が出来上がる、というものではない。この点は日本語の「電話に出る」を思い浮かべるとイメージしやすくなる。まさか「電話に」の後にどの動詞を使うか迷い、今日は「出る」を使おうなどと思って「電話に出る」と発話する日本語母語話者はいないだろう。意味が予測可能であるように見えても、ひとかたまりで参照される言語単位はいくらでもある。answer the phone は熟語扱いされることは少ないかもしれないが、ひとかたまりの言語単位であるという点では kick the bucket と大きな差はないのである。

熟語と呼ばれているかどうかにかかわらず、母語話者が参照する言語単位を無理に分解しないほうが忠実な翻訳ができると考えるなら、これまで本稿で示してきた訳文の見え方も変わるはずである¹⁶⁾。たとえば、(12)の英文を「…を見てみれば、…がわかります」と訳したのを見て「意識」だと感じた読者もいるだろうが、母語話者が参照する言語単位を「直」に生かすのが直訳だとするなら、[Look at] というパターンを踏まえた上記の訳文はむしろ「直訳」だと言える側面もあるのである。

4.4. 「直訳」の反対は「意識」か

4 節の締めくくりとして、意識について考えておきたい。一般的に、意識は直訳の反義語（対義語）とされるが、果たして両者は常に対になる用語だろうか。先ほど徹底分解直訳と呼んだものを参考に検討したい。

徹底分解直訳は、実際の訳文として採用されることは少なく、むしろ直訳が成り立たないことを示すためにあえて持ち出されることのほうが多いかもしれない。たとえば、先述の (11) で取り上げた [The river burst its banks] であれば、「直訳すると『川がその土手を破裂させた』だが、実際には『川の土手が決壊した』という意味である」といった説明がなされる。では、ここで否定される直訳に対して、「川の土手が決壊した」は

意識なのだろうか。(17)に「ここ(=直訳)から、原文への忠実さを犠牲にして日本語としての自然さを優先させていくと、『意識』になっていく」と書いた。意識を作るプロセスには訳者の創意工夫、訳者の好みが伴うと想定されるだろうが、だとすれば「川の土手が決壊した」を意識と呼ぶのはふさわしくない。そもそも「川がその土手を破裂させた」は日本語として意味が通るものではなく、ここから訳者の工夫で訳を改善できるようなものでない。[The river burst its banks]を「川の土手が決壊した」と訳するのに必要なのは創意工夫ではなく、これが英語話者ならひとかたまりで覚えている表現だと知ることである。それを知っている訳者ならおおむね「川の土手が決壊した」のように訳すだろう。

このように考えると、直訳という言葉を用いるときに、その対として意識が想定されるとは限らず、直訳や意識といった分け方が常に成り立つわけではないと言うことができる¹⁷⁾。4.2節と4.3節を通して直訳を批判的に検討してきたが、意識が大切だと述べているわけではないのである。直訳と意識という区別に依拠しないとすると、翻訳の質を判断するための視座は他にないのだろうか。5節では、「直訳」「意識」に代わる考えとして「妥当な訳」を提案する。

5. 「妥当な訳」を目指す

5.1. 「直訳」「意識」から「妥当な訳」へ

前節までに論じてきたように、直訳は一般的に考えられているほど原文に「直」に対応しているとも言えず、また直訳と意識という区別が常に有効なわけでもない。そこで筆者らが提案したいのが「その訳は直訳か意識か」ではなく「その訳は妥当か」という判断基準である。

(9)で述べた通り、「訳す」というのは「ある言語においてある形式と結びついている意味を特定した上で、別の言語においてその意味に近い意味と結びついている形式を見つけ出す行為」である。認知文法に基づけば、

「意味の特定」には、ジャンルや文体の特徴、発話意図といった多様な側面を含めて意味を特定すること、母語話者が参照している言語単位を見抜いて意味を特定することが含まれる。それらを踏まえて別言語で近い意味を表す言語形式を挙げることができれば、妥当な訳を提示したことになる。たとえば、2.3.2 節と 4.2 節で見た *Does this mean what I think it means?* を「これってまさか」と訳すのは、意味の多面性、参照される言語単位の両面から見て妥当であると考えられる。

上記のように整理した上で、訳の妥当性には「体験が揃っているか」という視点も必要だと思われる¹⁸⁾。次のような表現を考えてみよう。*Where's John?* という問いかけに対して以下の返答があったとする。

(20) *He's out in the garden.*

(20) は *out* と *in the garden* という場所表現を 2 つ含んでおり、まず大まかに *out* であると述べ、次にそれが *in the garden* であると具体的に指定した形になっている。位置を 2 段階で表現するのは英語ではよくあることであり、このパターンも英語話者が参照する言語単位となっている（この表現について、詳しくは平沢 2021a を参照）。日本語では「彼が外に庭にいる」のような表現は通常許容されないが、それでは以下の 3 つであればどれがよいだろうか。

(21) a. 外の庭にいるよ。

b. 外にいるよ、そのどこかというと、庭だよ。

c. 庭にいるよ。

(21a), (21b) とともに、位置が 2 段階に指定されるという意味を見抜いた上で作られた訳文だとわかるが、一方で訳としてのぎこちなさは残る。

(21a) は「外の」が過剰な説明のように感じられ、とっさの返答として

はやや不自然である。(21b)は話し言葉らしい文体にしてみせているが、元の英文と違ってずいぶんと発言が継ぎ足されてしまっている。それに対して、(21c)は「外」という情報が含まれていない(したがって、この会話が部屋の中でなされているといったことは伝わらない)が、問いかけに対する答えとしては自然に聞こえる。この中でどの訳が妥当であるかと言えば、(21c)であると考えたい。(20)を聞いた英語話者は、ごく自然な、聞き馴染みのあるパターンを聞いたと感じるのであって、余計な説明が含まれているとか、発言が引き延ばされたといった印象は受けないだろう。日本語話者がそれに近い経験をするのに適した表現が(21c)だと言える。(20)と(21c)は「外」という情報を含むかどうかという点で意味にずれが生じているが、両言語の話者がその表現を聞いて得られる体験はおおむね揃っており、そのため(21c)は訳として妥当性が高いと考えられるのである。

次の例も体験を揃えることを重視した訳である(野中2021)。

(22) Boiled Potatoes with Garlic Mayonnaise

- Boil the potatoes in salted water for 12 minutes or until tender then drain well and arrange on a warm serving plate.
- Mix the mayonnaise with the garlic and lemon juice and spoon the mixture over the potatoes.
- Sprinkle over the parsley **and serve**.

([レシピ] 500 *Quick & Easy Recipes*)

茹でじゃがいものガーリックマヨネーズのせ¹⁹⁾

- じゃがいもは12分ほど(柔らかくなるまで)塩茹でし、水気をよく切り、温めておいた皿に並べる。
- マヨネーズにつぶしたニンニクとレモン汁を混ぜ合わせてソースを作り、じゃがいもにかける。
- パセリを散らして出来上がり。

英語レシピの最後の 1 文にはこのように serve が用いられることが多く、... and serve を見れば英語話者はレシピが終わったことを認識する。そのような体験を日本語で再現するにはどのような表現を用いればよいかと言えば、「…して出来上がり」だろう。serve が食卓に出すことを表す動詞であることを考えれば、... and serve と「…して出来上がり」の意味は完全に同じだとは言えないが、両言語の話者にとって聞き馴染みのあるレシピの締めくくり方であるという点で、これは妥当な訳だと言える。

もちろん、2つの言語で常に聞き馴染みのある表現が存在するとは限らず、また聞き馴染みよりも情報量が一致していることを重視して訳すことが重要になる場合もあるだろう。たとえば、学術文章や契約書を訳す際は、情報のずれが無いように注意が払われる度合いが高くなると思われる。翻訳する上で比較考量すべき要素は多様であり、どの要素を重視するかという取捨選択が常につきまとうが、できるだけ原文での体験と訳文での体験を揃えることを目指すなら、聞き馴染みは極めて重要なファクターの 1 つとなると言える。

5.2. 我々の実践

本節では我々が行ってきた翻訳実践を紹介する。上に示した通り、翻訳は様々な取捨選択を伴うものであるが、読者が目にするのは結果として生まれた訳文だけであり、その訳に至る過程は表に出てこない。ここでは、妥当な訳を目指す中で、筆者らがどのような点に悩んできたのか、そしてどのように対応してきたかの例を示すことで、読者に妥当な訳について考えるきっかけを提供したい。なお、本節の英文、訳文の下線は、引用に際して追加したものである。

5.2.1. 平沢訳 (2019)

(23) はいわゆる「マンガ論」に関する文章である Smith (2015) の冒頭部分、(24) はその翻訳の平沢訳 (2019) である。ジャンルとしてはエッ

セイと学術論文の中間のような位置付けになるかと思われる。

- (23) My earliest reading memories are of comics. As I grew up in the rural Midwest during the 1970s and 1980s, comics were available to me in limited and often unpredictable ways. The local drugstore carried some mainstream comics, as did the local grocery [...], but there was no bookstore and certainly no specialty comics shop in our small town of 800 people.

([エッセイ, 学術論文] Scott T. Smith, “Who Gets to Speak? The Making of Comics Scholarship”)

- (24) 思い出せる限り、人生最初の読書体験はコミックだった。私が子供時代を過ごしたのは1970～1980年代のアメリカ中西部の田舎町。コミックの入手経路は限られていて、手に入ったのはあくまで運ということも多かった。地元のドラッグストアに行けばメインストリーム・コミックがいくつか置いてあって、近所のスーパーでもそれは同じだったが[…]人口800人の小さな町に本屋はなく、ましてコミックの専門店などあるはずもなかった。

(平沢慎也訳「語る権利は誰の手に：コミック研究の成り立ち」)

ここでは(23)の「妥当な訳」を求めてどのような判断を下したのかを説明したい。

まず、grow up というフレーズは、(場合によっては高校卒業くらいまでを含めて)子供時代をどう過ごしたか、どんな子供だったかを語りたいという発話意図のもとに非常に頻繁に用いられる。「成長する」や「大人になる」といった言葉が定番の訳語だと思うが、「1970～1980年代にアメリカ中西部の田舎町で{成長している／大人になっていっている}とき」というのは、前述の発話意図が伝わりにくく、妥当な訳ではないと思われる。「…で子供時代を過ごす」くらいが妥当だろう。

as 節をどう訳すかという問題もある。周知の通り接続詞の as には色々な意味・用法があるが、ここでは「時」の用法というのが自然な解釈である。つまり Smith 氏が 1970～1980 年代にアメリカ中西部の田舎町で子供時代を過ごしていた時間の幅と、comics were available ... である時間の幅が一致するということである。そして、文頭という位置を考えるとこの as 節は場面設定の働きをしていると考えられる。一番言いたいのは comics were available ... ということなのだが、急に comics were available ... と書いても唐突なので、いつの話なのかを前提情報として先に提示するという手法が取られているわけである。これを日本語でどう再現したらよいか。真っ先に思いつくのは次のような訳かもしれない。

(25) 私が 1970～1980 年代のアメリカ中西部の田舎町で子供時代を過ごしているとき、コミックの入手経路は限られていて、手に入ったのはあくまで運ということも多かった。

この訳文は（原文が極めて自然であるのに対して）やや不自然に感じられる（上の「？」はその不自然さを表したもの）。そこで、原文と同等の自然さを確保し、原文を読む体験と訳文を読む体験を揃えるべきと判断し、(24) のように翻訳した。「…の田舎町。」というように体言止めを利用しているわけである。おそらくここでありえる反論は、体言止めなどというものを使っては原文の意味から離れてしまう、というものである。しかし、果たしてそうだろうか。日本語の体言止めには色々な意味・用法が慣習化しているが、そのうちの 1 つは、以下に例示するように、後続の内容のお膳立てとして場面設定を行うというものである。

(26) 謎解きの舞台は、江戸時代の広島城下。広島城主の一人娘「さいごく姫」の盗まれたかんざしを、西国街道にちりばめられた 14 の謎を解き明かし、探し出すというミッションです。

(〔WEB〕 広島市の公式フェイスブックページの「西国街道謎解きウォーク」紹介文²⁰⁾)

さらに、この用法の体言止めの特徴には書き言葉の冒頭付近で用いられやすいという特徴もあるが、(23)の英文でも as 節は書き言葉の冒頭付近で用いられていると言える。こうして考えると、英語の as 節の場面設定用法を日本語の体言止めの場面設定用法で訳すのは原文に忠実でないという主張が成り立たないことがわかるだろう。

続いて主節の comics were available to me in limited and often unpredictable ways に移ろう。available のあとに limited が使われるというのはお決まりのパターンである。ある商品が発売されたのだが数量限定だとか、利用可能なのだが期間限定だとかいったことを伝えるのに頻繁に用いられる言い回しである。これを「コミックは限られた方法で入手可能だった」と訳しては、普通さの度合いが大きく下がってしまう。「コミックの入手経路は限られていて」と訳すと意味だけでなく普通さの度合いまで揃い、原文と同様に頭にスッと入ってくる体験を再現できるため、訳としてより妥当であろう。

5.2.2. 野中訳 (2018)

(27) と (29) は一般向けに医学について論じた Mukherjee (2015) から引用したもので、それぞれに野中訳 (2018) を付けている。

(27) Lewis Thomas entered medicine at one of the most pivotal transitional moments in its history. We tend to forget that much of “modern medicine” is, in fact, surprisingly modern: before the 1930s, you would be hard-pressed to identify a single medical intervention that had any more than a negligible impact on the course of any illness (surgery, in contrast, could have a transformative effect; think

of an appendectomy for appendicitis, or an amputation for gangrene). Nearly every medical intervention could be categorized as one of three P's—placebo, palliation, and plumbing.

([エッセイ, 学術文章] Siddhartha Mukherjee, *The Laws of Medicine: Field Notes from an Uncertain Science*)

- (28) ルイス・トマスが医学の道に進んだのは、医学の歴史上もっとも重要な転換期のひとつと言える時期でした。「現代医学」と言われているものの多くが、実際には驚くほど最近になってから生まれたものであることを、私たちはつい忘れてしまいます。1930年代以前は、完治はおろかある程度以上効果のある治療法を見つけるのにも苦労していました（一方、外科手術はひと目でわかるような効果をもたらしていました。虫垂炎になったときの盲腸の切除、壊疽を起こして腐った身体の切断などを考えてみてください）。当時のほとんどすべての医療行為は、次の3つのうちのどれかに分類できてしまいます。薬らしいものを処方すること、緩和薬を出すこと、トイレに行かせることです。

(野中大輔訳『不確かな医学』)

(27) の1つ目の下線にある“modern medicine” ... surprisingly modern では、modern という言葉が2回現れており、日本語でも同じ語を繰り返したいが、「現代医学は驚くほど現代的だ」のように訳してしまえば、日本語として意味がよくわからなくなる。ここでは内容の正確さを大切にして、2つ目の modern を「最近になってから生まれた」としている。2つ目の下線では、p から始まる語が3つ (placebo, palliation, plumbing) 並べられているために three P's という言い方になっている。訳文でも語頭が揃った表現を3つ並べるのがもっとも妥当性が高いと言えるが、今回の場合それは極めて困難である。ここでは語頭の統一にはこだわらないことにして、three P's を単に「次の3つ」と訳した（ただし、3つの表現の末尾は「…すること」で揃えた）。

(28) は原文にあった遊び心よりも情報を正確に伝えることを優先して訳した箇所であった。しかし、原文にあった言葉遊びを生かすことを諦めたわけではない。こうした原文の持ち味については、別の箇所で示せないかと考えたのである。それが (29) である。

(29) This book began as a means for me to discover tools that might guide me through a reconciliation between these two spheres of knowledge. The “laws of medicine,” as I describe them in this book, are really laws of uncertainty, imprecision, and incompleteness. They apply equally to all disciplines of knowledge where these forces come into play. They are laws of imperfection.

(30) この2つの領域にある知（[引用者注] 情報知と臨床知）を融合するための道具立てを見つけられないか——そうした模索が本書のきっかけです。この本の中で「医学の法則」と呼んでいるものは、実際には不確かさ、不正確さ、不十分さにまつわる法則です。このような「不」の力が働く知の分野なら、何にでも当てはまります。それは不完全性の法則なのです。

(29) にある *uncertainty, imprecision and incompleteness* の部分は、語頭の異なる3つの語が用いられているが、日本語で「不確かさ、不正確さ、不十分さ」とすれば「不」で揃えることができる。次の *these forces* を「このような『不』の力」とすることで、著者 Mukherjee の巧みな言語感覚を伝えることができたのではないかとと思われる。原文を読む体験と訳文を読む体験を1文レベルで毎回揃えることは現実的ではないが、1冊全体を通して読んだときの体験を揃えることはある程度可能なはずである。このような形で訳文の妥当性を高めることも重要だろう。

6. 結語

本稿では、認知文法の理論的前提——特に意味は多面的であるという前提、母語話者は脳内に定着している言語知識の中でできるだけ具体的な大きな単位を参照するものだという前提——を認めるならば、訳というものについて重要な帰結が導かれることを論じた。その帰結とは、文を可能な限り細かくパーツに分解してそのパーツごとの訳語を組み合わせたいわゆる「直訳」は一般的に考えられているほど原文に「直」に対応しているわけではないという帰結（および、訳としての自然さを優先したいいわゆる「意識」が原文に忠実でないとも言えないという帰結、加えて、いわゆる「直訳」と「意識」は同じ軸の両極端に位置づけられるという単純な関係にはないという帰結）である。

本稿では、さらに、「直訳」「意識」という概念それ自体に十分な土台・根拠がないことを踏まえ、訳の性質はどのくらい直訳的・意識的かではなくどのくらい妥当かという観点から評価されるべきだと主張した。ここで言う妥当性とは、訳の意味が原文の意味にどれくらい近いかに加えて、訳の聞き馴染みの度合いが原文の聞き馴染みの度合いにどれくらい近いかということまで含めた、総合的な「体験」の近さを基準に判定されるものである²¹⁾。原文の表現に聞き馴染みのある表現が多く含まれているならば、訳の方も頻度の高い表現が多く含まれている方が「体験」が揃う。逆に原文が低頻度表現を含んでおり、読者に違和感や読みにくさを感じさせるものであれば、訳文もそのようなものである方が近い「体験」をもたらす訳だということになる。

最後に本稿の意義について誤解のないように一言付け加えておきたい。本稿は「意識／直訳」という言葉の使用を禁止するべきだと言っているのではない。たとえば英語教師であれば、何かの事情で「直訳」という言葉を使う必要がある場合もあるだろう。しかし、そこで「直訳」と言いながらも実は母語話者の言語使用と「直」に対応しているわけではないのだと

自覚していることは重要だと思われる。

また、本稿は、英語の試験問題で和訳を出題したとして、採点する際に「直訳」を重視してよいのかどうかを考えるのに役立つだろう。そもそもある英文の意味理解をテストで問いたい場合に、果たして和訳問題という形で出題するのが適切であるかどうか悩む場合もあるかもしれない。その場合には本稿の意味と訳の関係に関する議論（3節）が役立つだろう²²⁾。

翻訳論の分野に身を置く読者は、すでに自らの分野で提出されている主張と（部分的に）重なる結論が本稿に含まれていると思われたかもしれないが、我々はその結論自体を新しいものとして提示しているのではない。その（少なくとも一部の人に）よく知られている結論が、認知文法という特定の言語理論を前提として論理的に導き出すことができるということがポイントである。逆に、翻訳論の分野で提出された結論と異なる場合には、どのような前提が食い違っているから結論が異なるのかを考えることによって、言語（観）の深いところが浮き彫りになるであろう。

このように英語教育に関わる人にとっても翻訳論に関わる人にとっても——もちろん純粋に言葉、意味、訳を愛する多くの人にとっても——言語の根本的なところについて考えるきっかけを提供するところに、本稿の一番の存在意義がある。

Notes

* 本稿は2022年9月11日にくろしお出版主催で行われたオンライン講演会 (<https://www.9640.jp/events/8566/>) の内容に基づいている。

- 1) 言語学論文の慣習に従い、文献は「Langacker 1987」のような形で略記する。「Langacker 1987」はLangackerが1987年に出版した文献のことである（ページ数まで載せるときには「Langacker 1987: 58」のような形になる）。言及した文献はすべて参考文献リストに省略のない形で記載されている。
- 2) 認知文法と認知言語学は（かなり似た名前ではあるが）同じものではない。認知文法は、認知言語学という大きな潮流に属する理論の一つとして位置づけられる（西村1997、篠原1997）。

- 3) 2.1 節と 2.2 節の内容は平沢 (2022) の 3.1 節と 3.2 節の例を変更したもので、趣旨は同じである。
- 4) ここで言う具体・抽象とは、図示のしやすさや理解のしやすさを指すのではないことに注意されたい。
- 5) 本稿における「知識」は(基本的に)無意識のうちに習得した知識を指す。
- 6) 本稿における「参照」は(基本的に)無意識のプロセスであり、「色々な文献を参照してレポートを書く」のような意図的行為を指すのではない。
- 7) ①の意味は簡略表記したものであり、厳密な意味に関しては(while や as との違いも含め)古賀(1998)を参照されたい。
- 8) <https://www.foxnews.com/media/biden-russia-ignorance-speech-ukraine>; 2022年8月3日閲覧
- 9) 言語学の歴史としては、まず音声の研究が盛んになり、それに遅れを取る形で意味に関連する諸分野の研究が発展したという経緯がある。この原因の1つとして、意味は直接的に知覚できないものであるということが挙げられる。
- 10) 英語圏のドラマや映画では、恋人に I love you を言うタイミングに関する悩みや失敗というのは定番ネタである。たとえば *How I Met Your Mother* (Season 1, Episode 15; Season 2, Episode 12), *The Office* (Season 6, Episode 24; Season 7, Episode 16), *Fuller House* (Season 2, Episode 10), *The Big Bang Theory* (Season 3, Episode 19) など。
- 11) たとえば、[under [年齢]] のジャンルのな特徴として、禁止や許可に関わる取り決めを提示する際に用いられやすいという点を指摘したが、禁止や許可は発話意図の一種である。
- 12) 箸を使いこなしている人は箸を使う際の手の動かし方(箸の知識)を十分に知っていることになるが、その動かし方を言葉で明示的に説明できる人はごくわずかだろう。
- 13) 「訳」についての山本(2020: 84-86)の記述は、こうした「意味」の観点から捉え直すことができる。
- 14) <https://www.asahi.com/ajw/articles/14624963>; 2022年6月20日閲覧
- 15) [for every [数字 X], there are [数字 Y]] で「[X ~人(個)] に対して [Y ~人(個)] の割合である」という意味。『オーレックス英和辞典』の for の項目(語義 15)には For every five who passed, there were three who failed. 「合格者 5 名に対して不合格者 3 名の割合だった」という例が載っている。
- 16) プロの翻訳者の誤訳の性質について詳細に分析した鷺尾(2022)は、認知文法に立脚した論文ではないが、母語話者の参照する具体的で大きな単位を掴み損ねることが誤訳の大きな原因となることを指摘したものとして解

積することが可能だろう。

- 17) 意識と直訳という区分を問い直すという営みについては、山本（2020：第8章）も参照。
- 18) ここでいう「揃っている」については、翻訳研究では「等価性」(equivalence) の名のもとで議論されることがある。Cook (2010：第4章) の議論が参考になる。
- 19) レシピでは目的語がよく省略されるが、ここでは drain, arrange, serve の目的語が省略されている。garlic を「つぶしたニンニク」と訳しているのは、引用箇所よりも前の材料説明で 1 clove garlic, crushed と書かれていたのを受けてのこと。
- 20) <https://www.facebook.com/HiroshimaCityOfficial/photos/a.1454189534828592/2874095399504658/?type=3>；2022年9月8日閲覧
- 21) 筆者らが調べた限り、Langacker 自身がある表現の（頻度に応じた）聞き馴染みをその表現の意味の一側面と認定している記述が見つからなかったため、本稿ではひとまず暫定的に聞き馴染みを意味ではない要素として考え、「(多面的な) 意味 + 聞き馴染み = 体験」という図式を想定して論じてきたが、聞き馴染みを意味の一側面として捉えることも可能かもしれない。その場合には「(多面的な) 意味 = 体験」となる。
- 22) 教育との関連を考える際には Cook (2010) も大いに参考になる。

参考文献

- Cook, Guy (2010) *Translation in language teaching: An argument for reassessment*. Oxford: Oxford University Press.
- Davies, Mark (2008-) *The corpus of contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Fillmore, Charles (1982) Frame semantics. In: Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the morning calm*, 111–37. Seoul: Hanshin Publishing.
- 平沢慎也 (2019) 「英語の接続詞 when：「本質」さえ分かっているなら使いこなせるのか」森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を紡ぐ』161–182. 東京：くろしお出版。
- 平沢慎也 (2021a) 『実例が語る前置詞』東京：くろしお出版。
- 平沢慎也 (2021b) 「if I were you の学び方：発話意図への注目」『英語教育 (2021年12月号)』58–59.
- 平沢慎也 (2021c) 「関係代名詞 what：本質さえわかっているなら使いこなせるのか」『英語教育 (2021年5月号)』60–61.
- 平沢慎也 (2022) 「英語の前置詞 on と「関係の断絶による迷惑」」『教養論叢』143：105–138. (https://researchmap.jp/shiraresearch/published_papers/)

36518310)

- 平沢慎也・野中大輔 (2021) 「「貧相な文法」から「豊かな文法」へ」『英語教育 (2021年4月号)』62–63.
- 古賀恵介 (1998) 「when の意味論」『福岡大学人文論叢』30 (3), 1639–1966.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, Vol. 1, *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1988) A usage-based model. In: Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in cognitive linguistics*, 127–161. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York, NY: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) A dynamic view of usage and language acquisition. *Cognitive Linguistics* 20(3): 627–640.
- Langacker, Ronald W. (2016) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. In: Grzegorz Drożdż (ed.), *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, 23–53. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Mukherjee, Siddhartha (2015) *The laws of medicine: Field notes from an uncertain science*. (TED Books) New York: Simon and Schuster. [野中大輔訳 (2018) 『不確かな医学』東京：朝日出版社.]
- 西村義樹 (1997) 「認知言語学の潮流」『英語青年』142 (12) : 650–654.
- 野村恵造ほか (編) (2016) 『オーレックス英和辞典』(第2版) 東京：旺文社.
- 野中大輔 (2021) 「話し手と聞き手の姿, 見えていますか? : ジャンルについて考える意義」『英語教育 (2022年1月号)』62–63.
- 野中大輔 (2022a) 「複数の辞書を見る楽しみ: 「知らない単語を調べるための道具」から「よくある言い回しを調べるための道具」へ」『英語教育 (2022年9月号)』38–39.
- 野中大輔 (2022b) 「「豊かな文法」のための言語学入門: 日本語を見つめて英語に生かす」Festina Lente 講演会 (2022年3月20日).
- 野中大輔・平沢慎也 (2022) 「認知文法・使用基盤モデルにおけるサピアの現代的意義」『日本エドワード・サピア協会研究年報』36 : 81–84.
- Smith, Scott T. (2015) Who gets to speak?: The making of comics scholarship. In: Czerwiec, M. K., Ian Williams, Susan Merrill Squier, Michael J. Green, Kimberly R. Myers, and Scott T. Smith, *Graphic medicine manifesto*, 21–40. University Park, Pennsylvania: Penn State University Press. [平沢慎也

- 訳 (2019) 「語る権利は誰の手に：コミック研究の成り立ち」小森康永・平沢慎也・安達映子・奥野光・岸本寛史・高木萌訳『グラフィック・メディアス・マニフェスト：マンガで医療が変わる』21-44. 京都：北王路書房.]
- 篠原俊吾 (1997) 「認知意味論と認知文法」『言語』26 (10)：52-59.
- 鷲尾龍一 (2022) 「意識と誤訳の間：母語話者と非母語話者を隔てるもの」『日本エドワード・サピア協会研究年報』36：1-25.
- 綿貫陽・ピーターセン, マーク (2011) 『表現のための実践ロイヤル英文法』(例文暗唱 CD 付) 東京：旺文社.
- 山本史郎 (2020) 『翻訳の授業：東京大学最終講義』東京：朝日新聞出版.